

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

この愛のために撃て

2010年・フランス映画
配給/ブロードメディア・スタジオ
85分

2011 (平成23) 年6月23日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督：フレッド・カヴァイエ
脚本：フレッド・カヴァイエ/ギョーム・ルマン
出演：ジル・ルルーシュ/ロシュディ・ゼム/ジェラルム・ランヴァン/エレナ・アナヤ/ミレイユ・ペリエ/クレール・ペロ/ムーサ・マースクリ/ピエール・ブノスト/ヴァレリー・ダッシュウッド/ヴィルジル・ブランムリ

👁️👁️ みどころ

フランスのフレッド・カヴァイエ監督作品のスピード感とサスペンス性は絶好調！しかも、そこに幸せな夫婦生活を突如侵害された夫の妻への愛がテーマとなれば……。夫の願いはただ1つ、妻を取り戻すことだけ。しかし、妻の誘拐を脅迫ネタに否応なく巻き込まれた事件の奥行きは意外に深そうだ。

パリ市警にはこんなにも深い闇が？メリエール射殺事件の真相とは？一体、誰が敵で誰が味方？緊張感いっぱい85分間の疾走は、カイカン！

■□■映画は「つかみ」が大切！いきなり追跡劇が！■□■

何ゴトも最初の「つかみ」が大切。しかし、本作はいきなり冒頭から、何の説明もないままスピーディーな追跡劇が始まる。腹のキズを手で押さえながら必死で逃げる謎の男サルテ（ロシュディ・ゼム）は途中で相棒の男と携帯で連絡が取れたが、追手の追跡によってついにトンネル内で追いつかれてしまったから、ここでお陀仏？そう思った途端、トンネル内を走ってきたバイクによってサルテがはねられてしまったから、現場は大混乱に。

サルテは救急車で病院に運び込まれたが、さてその生死は？そして、何よりもサルテは一体何者？また、追っかけていた男たちは？前作の『すべて彼女のために』（08年）において、冒頭10分間のつかみのすばらしさを堪能させてくれたフレッド・カヴァイエ監督（『シネマルーム24』173頁参照）が、本作冒頭でもいきなり観客の目を釘付けにし、次の展開への興味と関心を一気に高めてくれる。まずは、そこに注目！

■□■フランス映画は、スピードが命！■□■

近時の邦画は2時間を丸々使わなければ損だとばかりに、TVドラマ並みのだらだらと間延びした説明調のシーンが多い。しかし、フランス映画は概して90分~100分ぐらいのコンパクトな作品が多い。とりわけ、リュック・ベッソン監督作品やフレッド・カヴァイエ監督作品はスピードが命だから、その傾向が強い。前作の『すべて彼女のために』は96分、本作は85分だ。もちろん、冒頭のシーンは何の説明もないから、不親切と言えば不親切。しかし、だからこそ逆に観客は「こりゃ一体何のこっちゃ!」と集中してくれるのだから、映画作りは面白い。

■この誘拐の目的は?■

「つかみ」の後に本筋のストーリーが始まるが、本作の主人公は妊娠中の妻ナディア(エレナ・アナヤ)と共に幸せに暮らしている看護助手のサミュエル(ジル・ルルーシュ)。パリの病院に勤務している彼が多く患者と接触するのは当然だが、ある日入院中の男サルテのベッドに怪しい男が近づき、命綱の管を切断するという悪事を働いたから、サミュエルはとっさに救命処置を。医師資格のないサミュエルがそんな行為をするのは問題だが、この際やむをえず・・・。

ともかく、サミュエルがそんな形でサルテの救命に関与した(?)ため、帰宅してナディアと楽しいひとときを過ごそうとしていると、いきなり謎の侵入者から頭を殴打され、ナディアを誘拐されてしまったから大変。犯人の電話での要求は、「お前が勤務している病院からあの患者を外へ連れ出せ」ということ。そして、タイムリミットは3時間。もはやサミュエルには選択の余地はないが、既にサルテには警察の警備がついていた。果たして、サミュエルは犯人の要求を満足させかつ、ナディアを取り戻すことができるのだろうか?

サミュエルは一介の看護助手だから、格闘能力はないし、ナイフや拳銃にも縁がないのは当然。そんなサミュエルに命令を下す男たちや、途中から奇妙な信頼関係が生まれるサルテたちは、それぞれなんらかのプロらしい。さらに、サルテとサミュエルの逮捕に向かうパリ警察のチームや、大物実業家メリエールの射殺事件を担当している大物刑事ヴェルネール(ジェラルド・ランヴァン)のチームたちもそれぞれプロ。誰が敵で誰が味方かすらさっぱりわからない混乱の中で、サミュエルが最善の行動をとることができるのかどうかはそもそも疑問だし、肉弾対決や拳銃対決になった場合サミュエルは一体どうするのがいいか? そんな心配でいっぱいだが、愛する妻を取り戻したい、しかも身重の妻とそのお腹の中の子を取り戻したい、そんな愛さえあれば・・・。そう考えれば、本作の邦題『この愛のために撃て』は、何とも素敵!

■パリ警察にはこんな大きな闇が・・・■

6月23日付夕刊各紙は、大阪府警西淀川署の男性巡査部長(39歳)が現金を受け取る見返りに内部情報を漏洩したという疑惑で、巡査部長が現金の授受をおおむね認めたこ

とを報じた。大阪府警はこれを地方公務員法（守秘義務）違反容疑で捜査を進めていくらしいが、日本でもこのような警察官の不祥事は頻発しているし、警察内部の闇もいろいろとある。しかし、本作でカヴァイエ監督が描くパリ警察内部の腐敗はまさに構造的、組織的そしてあっと驚く大規模なものだ。

映画では「メリエール事件」の詳しい説明はないが、それがパリを震撼させた大事件であったことはまちがいない。その捜査の指揮を執るのが大物刑事ヴェルネールだが、そのヴェルネール刑事率いる殺人課の捜査班とサルテとその逃亡を手助けしたサミュエルの行方を追うパリ市警の別の課のチームとの縄張り争いは相当なもの。メリエール事件のキーを握る男は情報屋のアルマーニらしいが、最初この男に接触できるのは誰？後に、サルテと行動を共にしていた男はサルテの弟であることが判明するが、彼の運命は？また、ヴェルネール刑事がサルテの住居内でサルテとサミュエールを逮捕した時点であっと驚く事件の全貌が明らかとされるから、ヴェルネール刑事の計算ではそこですべてジ・エンドだったはず。ところが、そこでの思わぬサミュエールの反撃によって、再度の逃走劇が・・・。

こりゃ何としても逃走し、ナディアを助け出すと共にパリ警察のこんなにもひどい闇を暴かなくては・・・。そうなると、今やサミュエールの逃走劇は個人的なものではなくなったから、観客の私たちもこれを心から応援しなければ・・・。



(C) 2010 LGI FILMS - GAUMONT ? TF1 FILMS PRODUCTION ? K. R. PRODUCTIONS

■□■星の差は、女優のベッピン度の差？■□■

愛する妻への愛のために、幸せな夫婦生活を奪われた夫が命を懸けて行動するスリルと

サスペンス。それがカヴァイエ監督の前作と本作に共通するテーマだが、そうすると愛する妻の存在感がポイント！前作でその役をつとめたドイツ生まれのダイアン・クルーガーは『イングリオル・バスターズ』（09年）『シネマルーム23』（17頁参照）等で私が注目している美人女優だから、その美貌と存在感はバッチリだった。他方、本作で最初から大きなお腹をたっぷりと見せるナディアを演じるエレナ・アナヤは、『ヴァン・ヘルシング』（04年）、『アラトリステ』（06年）、『美しすぎる母』（07年）、『ジャック・メスリーヌ／フランスで社会の敵（パブリック・エナミー）NO. 1と呼ばれた男 Part 1 ノワール編』（08年）等で見ているが、主役ではないからそれほど強い印象は残っていない。

本作前半では、妊娠中であることを気遣う夫の心遣いを無視して（？）キスを何度もねだり、夫を「その気」にさせるちょっと好色な（？）妻ナディアの姿や、後半では大きなお腹を抱えながら犯人や警察官の手によって連行されたり、やっとサミュエルと再会できた後は必死に夫にしがみついて逃げ回る姿を熱演している。本作では身重であることが大きな意味を持っているため、女性本来の魅力（？）を発揮できなかったのは少し残念だが、番外編（？）で見せる幸せそうな笑顔は最高！もともと、前作におけるダイアン・クルーガーの魅力には及ばないから、私の採点は前作の星5つに対して本作は星4つ。しかし、こんないいかげんな採点でいいのかな？

2011（平成23）年6月24日記

生活保護受給者が205万人を突破！

1) 「家族のためなら何だって！」というテーマで集めた映画はそれぞれすごい「闘い」が見モノ。それは、フランスの『この愛のために撃て』でも、アメリカの『スリーデイズ』でも、中国の『我らが愛にゆれる時』でも同じだ。

2) 他方、戦後66年間平和を享受する中で経済成長を続けた日本は、国民すべてが平等でかつ一人一人が自由な行動を取れば国全体が豊かになるという理想の国を目指したが、私に言わせればそれこそまさにマルクスやエンゲルスが唱えた理想的な共産主義国家。「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」と

いう共産主義の理想がホントに実現できれば問題なしたが、現実は今豊かな生活を享受する反面、借金は遂に1000兆円を超え、生活保護受給者も205万人を突破した。

3) 働けない人は国が保護する。それは立派な思想だが、税金は無尽蔵にあるわけではない。総額11.2兆円規模の復興増税案は25年間の償還で与野党が合意したが、消費税の10%増税を含むニッポン国の財政再建の途が見えない中、205万人を突破した生活保護者に対して国はいかなる対応を？

2011（平成23）年11月9日記